



自分のために仕立てた注文服。それがどんなに着心地よく、自分をスマートに見せてくれるものか。「合わせる」「適応させる」というスーツ【SUITS】本来の意味を考えれば、きちんと採寸して、不自然なしわやバランスの違和感がなく、身体の曲面に沿ってそのスーツである。とはいえ、オーダーメイドスーツには、ごく限られた富裕層か、服にこだわる趣味人だけのもの、という価格や意識の壁があることも確か。おいそれと手が出せない、と二の足を踏んでしまうのが一般的な感覚だろう。ただ、男性ならば自分を表現する手段として、女性ならば大切



な男性への特別なプレゼントとして、オーダーメイドという選択肢を知っていて損はないだろうと、豊橋にあるサルトリア、「アルデックス」を訪ねてみた。

● アルデックスは1958年創業の縫製工場で、正面にシヨールームがあり、

その裏に400坪の敷地の工場を持ち、現在ベテラン職人から若手まで60人の社員がスーツ作りにあたっている。地元にながら、高級紳士服のアトリエが豊橋にあるとは、これまで気づかなかつた。シヨールームの建物は一昨年建て替えられたものでまだ新しいが、表立ってアピールすることもしていない。というのも、アルデックスは縫製工場としてOEM生産(相手先ブランド製造)を手掛けることが主で、自社ブランドとしてのオーダーメイドは、仕事のごく一部。本社である豊橋と、東京にシヨールームを持つているが、アンテナショップという意味合いが強く、積極的な営業はしていない

い。そのためよほどのスーツ好きでなければ知らない、隠れた存在となっている。ただし工場の技術力は高く評価されており、相手先ブランドは誰もが知る有名なところばかり。そんな高い技術と丁寧な仕事で作られるスーツが、工場直販のリーズナブルさで作れるとあつて、ファッション通の間ではひそかに憧れを集める存在なのである。

● 緑の木陰に包まれた、木の香りがするお洒落な外観。大きな扉を開けて店内に入ると、職人たちの手で仕立てられたスーツが、壁際に陳列された風情でディスプレイされている。高級紳士服店という緊張感はあるものの、肩肘を張らないですむ温かい印象は、木肌を生かしたぬくもり感のある佇まいと、物腰やわらかな店員さんのおかげだろうか。やはりまず目を惹くのは、美しいグラデーションを描くテキスタイルの棚。世界中のVIPに愛される服地の最高峰、Ermenegildo Zegna(エルメネジルド・ゼニア)のワインレッドのラベルは、既製品向けに生産された服地と明確に区別されたオーダーメイド

ドの証。このゼニアと並ぶ世界のトップブランド Loro Piana(ロロ・ピアーナ)、また最近注目されるERNO(エルノ)ユーロテックスなどが、アルデックスの主軸らしい。素人でも耳にする一流ブランドに圧倒されるが、パターンオーダーが10万円台で手に入る(国産服地なら5万円台)と、最高級素材のオーダーメイドスーツとしては格安だ。

● パターンオーダーは、あらかじめ用意された型紙を補正して、短時間かつ低価格で実現するシステムだが、身体に合うことはもちろん、バランス、スタイリング、完成度など、デザインが持つシルエットや雰囲気壊さないよう、補正は最小限に抑えるというのがアルデックスの考え方。そのためイタリアン・クラシカル派の技法に基き、マスターパターン作成に時間をかけてできるだけ補正を少なくする型紙を完成させた。補正は最小限に、ただし着丈、肩幅、袖丈、胴まわりのサイズ調整はもちろん、怒肩や撫肩の補正など、ディテールにまで丁寧に対応してくれるから、フルオーダーと遜色ない、自分のためにあつらえた「着」がでる。

ビスポークに身を包む贅沢 その価値を知る大人たちのために

男性がビジネススーツに選べるベースカラーは基本的に、紺、グレー、茶の3色。デザイン的にも規制が多いため、研ぎ澄まされた表現分野として熟成された歴史がある。スーツにおける最高の贅沢は、自分の体型や好みに合わせ仕立て職人との対話から生まれるビスポーク(オーダーメイド)。職人が技と想いを込めた洋服に袖を通す至福を知ってほしい。

Photograph / Koshi Asano



「日本には日本の洋装文化があります。高温多湿な日本の風土で生まれたデキスタイルやライフスタイルから、ファッションを育てるために、著名な日本人デザイナーを招き、直接講習を行う。やりがいを感じて仕事に打ち込める環境と待遇を用意して、若手のやる気と才能を伸ばしているのだ。そうまで力を注いで後継者を育てようとするのは、日本人の職人をなくしてはならない、という使命感があるためだという。」

アルデックスの縫製工場には、若い職人たちの活気が溢れていた。仕立て業界は、どこも後継者不足が深刻で、「服を作りたい」という熱意の若者たちがこうして集まってくるのは信じられない現象なのだという。これには、山口社長の強い思い入れがあった。

「紳士服を丸縫いできる職人の平均年齢は65歳以上。次世代に、メイド・イン・ジャパンの服作りを残すには、ベテランの職人たちが針を置くまでの5年間で勝負です。その間に熟練工の技をできるだけ若手に受け継がせたい。そのために、閑散期を利用して、社内講習会「匠塾」を年間約20回開講しています。服を作ることが楽しくて仕方がない、というふうに、アトリエでは仕事が終わった後でも腕を磨こうと研鑽を積む若い子たちの姿がありますよ」

若手を育てるために、著名な日本人デザイナーを招き、直接講習を行う。

やりがいを感じて仕事に打ち込める環境と待遇を用意して、若手のやる気と才能を伸ばしているのだ。そうまで力を注いで後継者を育てようとするのは、日本人の職人をなくしてはならない、という使命感があるためだという。

「日本には日本の洋装文化があります。高温多湿な日本の風土で生まれたデキスタイルやライフスタイルから、ファッションを育てるために、著名な日本人デザイナーを招き、直接講習を行う。」

熟練工たちのサルトリアで受け継がれる メイド・イン・ジャパンへのこだわり

「紳士服を丸縫いできる職人の平均年齢は65歳以上。次世代に、メイド・イン・ジャパンの服作りを残すには、ベテランの職人たちが針を置くまでの5年間で勝負です。その間に熟練工の技をできるだけ若手に受け継がせたい。そのために、閑散期を利用して、社内講習会「匠塾」を年間約20回開講しています。服を作ることが楽しくて仕方がない、というふうに、アトリエでは仕事が終わった後でも腕を磨こうと研鑽を積む若い子たちの姿がありますよ」

「洋服も、握り寿司くらいの距離で、お客様と職人が相対して仕事をすべき」

工場閑散期(1,2,6,7,8月)を利用した、特別受注会が狙いめ

「洋服も、握り寿司くらいの距離で、お客様と職人が相対して仕事をすべき」

というのも、山口社長の言葉。いつかはデキスタイルメーカーとも連携して、ほんとうに日本の環境に合った、日本人が作る日本人のためのメイド・イン・ジャパンを目指しているという。次代のアトリエを担う若手職人たちには、「自分のものを縫う気持ちで商品をマーケットに送り出せ」と、常々語りかける。受け継がれる技と、伝統が形作るスタンダードな価値、そして時代性の香り。中国製の安価な量産の既製服か、海外の高級ブランドスーツが主流となる今だからこそ、「着に込められた情熱を纏う、オーダーメイドスーツを着られる大人を目指してほしい。」



アルデックス
豊橋ショールーム
豊橋市弘口町2-60
☎ 0532-32-5138
OPEN/10:00~18:30
定休日/火曜日
<http://www.aldex.co.jp>



Gift
アルデックス